

## キャリアの視点に立った学校生活づくりと 支援の在り方

～校務分掌とキャリア教育を関連させた学習活動の工夫～

千葉県立夷隅特別支援学校

電話 0475-84-4111

FAX 0475-86-3341



### 研究のポイント

「キャリアの視点に立った学校生活づくり」に焦点を当て、校務分掌とキャリア教育を関連付けながら、キャリアの視点に立った学習活動と支援の方法を探り、小学部から高等部段階に至る学習活動の系統性を明らかにするとともに、携わる教員の専門性の向上を図る。

#### ■学校の概要 <http://www.chiba-c.ed.jp/isumi-sh>

本校は、昭和55年に知的障害を対象とした養護学校として開校し、平成19年4月に千葉県立夷隅特別支援学校となった。いすみ市、勝浦市、御宿町、大多喜町を通学地域として、小学部、中学部、高等部が設置されている。今年度は、小学部16名、中学部16名、高等部35名、合計67名の児童生徒が在籍している。

#### ■研究課題

すべての教員がキャリアの視点を共通理解すると共に、学校生活全体を通して、小学部から高等部の児童生徒に対し、キャリア発達を高める指導支援にあたり、キャリア教育の充実を図る。

#### ■研究の目的と方法

##### ○目的

- ・校務分掌とキャリア教育を関連づけ、日々の学校生活全般を通じての実践を積み重ね、児童生徒一人一人のキャリア発達を高める。
- ・小学部、中学部、高等部に所属する各教員が捉えるべきキャリアの視点を共通理解し、学部間のつながりを明確化する。

##### ○方法

- ・分掌ごとに、キャリアの視点を取り入れた学習活動を検討する。
- ・小学部段階から高等部段階に至る系統性を整理する。
- ・年度初め、年度末に教員へのキャリア教育に対する意識調査を実施し、変容を探る。
- ・年2回、講師を招聘したキャリア教育研修を実施し、キャリア教育の理解を図る。

## ■研究概要

### 1 実践と成果

#### (1)キャリアの視点を取り入れた学習活動の工夫(分掌会議)

毎月1回、校務分掌会議を設け、それぞれの分掌でキャリアの視点でどのような学習活動が考えられるのか、具体的な案を出し合い、内容を検討した。それぞれの授業にどのように位置づけ、学習活動に広がりをもたせることができるか、様々なアイデアを出し合った。「キャリアの視点を取り入れた学習活動の広がり」として、本校所定の書式に記述し整理した。これは、全教員に配付し、学習計画や個別の指導計画を作成するときなどに活用できるようにしている。

#### (2)小学部から高等部に至る系統性の整理

それぞれの分掌会議で出されたアイデアを、「各学部と連携・継続した支援」として本校所定の書式に整理し、小学部段階、中学部段階、高等部段階、それぞれの学齢期に合わせての具体的な支援方法を取り上げた。他の分掌と学習活動が重複することも明らかになり、様々な分掌との連携を図る必要性を再認識した。

今後さらに、さまざまな学習活動の系統性について整理していきたい。

#### (3)キャリア教育に関する意識

年度当初にキャリア教育アンケートを実施した結果、キャリア教育は、「将来必要になるであろう職業に関する知識や技能を養うこと」という意見が多く、職業教育という意識が強くみられた。また、小学部の教員からは、「言葉は聞いたことがあっても、何をしたら良いかわからない、どんなことがキャリア教育か知らない」という意見もあり、小学部では、まだ先の事という意識も感じられた。アンケート全般からは、多くの教員が、小学部段階からのキャリア教育の必要性を感じながらも、小学部、中学部では、意識が薄く、高等部段階での進路指導や作業学習、職業の授業がキャリア教育の中心と捉えていることが伺えた。

12月に実施したアンケートでは、「キャリア教育は、子どもが将来より良い生活を送るための教育」といったイメージに変容してきているという結果が見られた。キャリア教育への理解が高まり、日々の実践や校外学習を計画する時に意識するようになったといった回答が多くあり、意識が向上してきたことが伺える。

また、教員個人の意識の向上だけではなく、学部・分掌間の連携といった学校全体を上げての取組が必要だと考える教員が増え、キャリアの視点で学習活動を捉えるためには、学校全体で一体感のある、キャリア教育を進めていくことが大事であるという意識が浸透してきたと考えられる。

### 2 課題

#### (1)取組の具体化

今年度整理した、小学部段階から高等部段階に至る学習内容を教育課程に反映させ、さらに具体化し、実践していく。

#### (2)評価方法の検討

教員が実践を振り返る評価方法と合わせ、主体的な学びへとつなげていくため、児童生徒自身の評価サイクルについても検証していく。